

最近引っ越してきたお隣さん最近  
引っ越してきたお

星海ほたる



—



# 目次

プロローグ . . . . .	1
お隣さんが家に乱入?! . . . . .	3
居候クール美少女が起きてくれないんだが . . . . .	6
友達になりたいな . . . . .	8
令嬢の実家でパーティー . . . . .	10
居候クール女子は悪役令嬢だったのか? . . . . .	14
雨降る放課後 . . . . .	17
風邪をひいた俺を看病してくれる美少女 . . . . .	20
居候美少女がお隣にお引越し?! . . . . .	23



## プロローグ

「今日は転校生を紹介する」

担任の小野先生が紹介し教室に女の子が入ってきた瞬間、男子がザワザワしだした。  
まあ無理もないかもしれない。  
なぜなら転校生はS級クラスの美少女だったから。

「実川紗希《みかわさき》です。よろしくお願ひします」

長くてサラサラな髪を靡《なび》かせて彼女は頭をペコリと下げた。  
大きく綺麗な瞳に長くくるんとしたまつげ。  
爽やかな顔立ちで適度な笑みを浮かべる彼女はまるでクールな天使のよう。

スカートが短いから、すらりと長い足が強調され160センチないくらいの身長でもスタイルが良く見える。  
まさに非の打ち所がないクール美少女だった。

「じゃあ、実川さんはあそこの席に座ろうか」

「はい」

「わからないことがあったら綾瀬《あやせ》に聞くといいから」

そう言い小野先生が指差したのは後ろの角にある俺の隣の席。  
彼女は席に座り俺の方を静かな目で見ると。

「.....よろしくお願ひします」

彼女の目は先程の笑みも感じさせないくらい冷たいものだった。



休み時間が始まって沢山の男女が実川さんの席を囲む。  
そして俺は男子から冷たい眼差しを受けていた。  
俺の時とは違い、実川さんは笑顔で皆に接している。

別に辛くもなかったけど少し不思議に思った。



放課後になり俺は一人暮らしをしているアパートに帰った。  
部屋も小さくて学校からは少し遠いけどまだ新しく綺麗で家賃も安いアパート。  
高校入学と同時に実家から移り住んでからもう五ヶ月くらい経つ。  
この生活にもだいぶ馴染んできた。  
まず風呂に入ってからテレビの電源を付けてソファーにもたれかかった俺は家のドア  
をノックする音に気づき玄関に向かった。  
鍵を回しドアを開けるとそこには、驚いた様子の転校生クール美少女が立っていた。  
驚きのあまり言葉を失う二人。

「……隣に引っ越してきた実川です。挨拶に伺いました」

「あ、はい。綾瀬です、よろしくお願いします」

そこはちゃんと形から入るんだ……

そういえば隣に誰か引っ越してくるって管理人さんが言ってたっけ。

「ここは綾瀬君の家《うち》？」

「はい、一人暮らしなんですけどね」

俺がそういうと実川さんは玄関の外に出て落ち着いた様子で、

『これも何かの縁なのかも』と言って深々と頭を下げて帰って行った。

彼女の表情は学校で見せた無表情とは違い温かいものだった。

## お隣さんが家に乱入？！

夏休み明けの新学期が始まり転校生がやってきたんだけど、俺の隣の席になったその子は俺にだけ少し冷たい態度をとるクール美少女。

放課後、家に帰りソファで寛いでいたら最近引っ越してきたお隣さんが挨拶に来たんだけど.....

そのお隣さんはこの日転校生としてやって来た実川さんだった。



新学期が始まって最初の休日。

俺は数少ない親友の高谷遊矢《たかやゆうや》と通話をしながらソシャゲに勤しんでいた。

「なあー、春、俺、実川さんのこと好きかも」

「へっ？ お前もう二次元にしか恋しないって言ってただろ」

「それは昔の話だ。てか実川さんって金持ちの家のお嬢様らしいんだって」

遊矢は馬鹿だな.....あんな美少女、俺たちみたいな陰キャには手の届かないような存在なのに。住む世界が違う。

それにしてもなんでお金持ちのお嬢様がこんなアパートなんかに住み始めたんだろ.....

「じゃあ俺、散髪の予約あるから通話切るわ」

「ああ、分かった」

にしてもあの恋愛アンチだった遊矢まで好きにさせるなんて流石次元が違うくらいの美少女だよな。



『コンコン』

ドアをノックする音。  
そういえばネット注文した詰め替えシャンプーが今日届くんだっけ。  
俺は簡単に服を着て玄関のドアを開けた。

「こんにちは。あの……少しだけ家の中に入れてもらえない？」

そこに立っていたのは配達員ではなく、うちの家のお隣さん。

「えっ……なんですか!？」

「後で説明するから！」



「あの、お茶と水どっちがいいかな？」

「じゃあ、お水で」

突然中に入れてと言われ勢いで家に入れてしまった。  
彼女はカーペットの上に正座し、あたりをキョロキョロ見回している。

「で、どうしたんですか？ 突然」

「これから言うことは誰にも言わないって誓って」

彼女は落ち着いた様子で俺の顔をじっと見るけどその目は少し余裕のないようにも見えた。

「うん。わかった。誰にも言わない」

「私、三日ほど前からストーカーに付きまとわれてるの」

「えっ……？」

最初は冗談に聞こえたけど彼女の目は本気だった。

「この間スーパーで買物してた時から視線を感じるようになって、家に帰ったらポストに手紙が入ってた……『君の事ずっと見てるから』って」

「……じゃあ警察とかに相談した方がいんじゃないかな？」

「ダメ。私は事を大きくしたくない。もしお母さんやお父さんが知ってしまったら心配して一人暮らしもさせてもらえなくなる。もしかしたら学校にも行けなくなるかも」

「じゃあ、どうするの？ このままだと危険な目に合うかもしれない」

そして実川さんは少し間をおいてから決心したような様子見せて言った。

「今日から少しの間ここに泊めてほしいの」

「え、でも。俺男だよ？」

「今はそんな事言ってもらえない。家事だってするし料理だって作る。だからここに泊めさせて、お願い……」

実川さんは俺に頭を下げ頼んできた。

俺だってまだ会ったばかりで何を考えているのかもわからないような人と一緒に暮らすのは正直不安だ。

でも彼女はここまでして俺に助けを求めてきてくれた。だから俺もそれに答えてあげたい。

「うん、いいよ。実川さん今日からよろしく。気の利いたことは言えない俺だけど何でも頼ってきていいから」

「綾瀬くん……ありがとう」

こうして俺は実川さんとこの小さなアパートで一緒に暮らすことになった。

## 居候クール美少女が起きてくれないんだが

朝の日差しに照らされ床の上で目が覚めた俺。

隣のベットでは実川さんがまだぐっすりと眠っていた。

彼女の表情は幸せそうでいつもの無表情とは程遠いものだった。

俺は実川さんを起こさないようにそっとキッチンの方に行き朝ごはんの用意をする。

朝ごはんの用意といっても電子レンジでできるレトルトカレーなんだけど……

温めたカレーをご飯の乗った皿に盛りガラステーブルの上に置く。

準備ができたし冷めると良くないと思い実川さんを擦った。

「実川さん。カレー作ったから一緒に食べよ」

「むにゃむにゃ……綾瀬くん、おかわりいー」

夢の中ではもう朝ごはんを食べてるみたいだな……

なんかいつもクールな実川さんがこんなだとイメージが崩れるなあ。

「実川さんっ！ 学校遅刻してるよ、起きないと！」

「へっ！？ 今日って何曜日？」

「おはよう実川さん。今日は日曜日です」

「騙したの？ ひどいっ！」

「ごめんなさい。起きてくれないものだから……」

実川さんはほっぺを少しだけ膨らませ怒った顔をするんだけど全然怖くない。

多分学校での見る無表情の方が百万倍怖いだろう。

「あっ！ 私、カレー大好きなんだー。朝からってのには疑問なんだけど」

「いやあ、レトルトカレーしかなくて……」

「まあ美味しいし居候の私が贅沢言えないんだけどさっ！」

学校ではいつだって塩対応でいつも無表情の実川さんが家では沢山笑って沢山話してくれる。これは一体どういうことなんだ？

「んっ……？ 綾瀬くんどうしたの。何か考え事？」

「いや、いつも学校ではクールなのになんで家に帰ったら別人のように明るいのかなって」

「それはまあ、住まわせてもらってるの愛想悪かったら良くないしね。それにこんな姿見せられるのも実は綾瀬くんだけなんだよ？」

「へっ！？……」

「すんごく顔赤いね。そういうところも好きだよ」

なんかむちゃくちゃからかわれたんだけど……

でも俺だけって、もしかして凄く信頼してくれてる？ まさかな。

「そーいえば来週、私の実家でパーティーするんだけど来る？」

「えっ！？ でもそれって俺が行ったら邪魔になるんじゃあ……」

「大丈夫だよー。まあ用事がないなら絶対参加だからね」

そう言ってから実川さんは最後の一口を食べ美味しそうに咀嚼した。

「お皿は私洗うから流し台に置いといてね」

「うん。ありがとう」

一瞬、恋人かっ！ って突っ込みたくなるのを我慢し俺は頭を下げた。

## 友達になりたいな

「ねえっ！ 綾瀬くんって彼女さんとかいるのお？」  
「いやっ……できたことすらない」

朝から俺の心の奥底にある悩みをえぐってくるこの女子は天然な美少女でクラスで人気な木村真弥《きむらまや》。

低身長で細い身体だけどスタイルは良くアンバランスなほどに胸が大きい。

髪はショートでサラサラ。クラスでは影で割とモテている美少女。

今は一限目が終わった後の休み時間なんだけど実川さんに話に来たついでに俺も絡まれてしまった。あんまり女子と話すのは得意じゃないんだけど……

「以外だなあー、じゃあ実川さんは？」  
「いなかったよ。前の学校は女子校だったし《《今までは》》気になる人なんていなかったから……」

今、『今までは』って言ったよな……今は誰かいるみたいな言い方。  
でも実川さん好きな人とかいなさそうだし恋愛とか興味なさそう。

「そっかあー、じゃあ恋人作ろうよっ！」  
「「へっ!？」」  
「だって実川さん凄く可愛いんだし、アタックさえすればイチコロだよー」  
「そ、そうかな……ありがとう」

木村さんの言う通り実川さんなら好きな人ができればすぐに付き合えそう。  
あんな美人で可愛くてお金持ちのハイスペックお嬢様なのになんで今まで恋人がいなかったのか、不思議なくらいだ。

「でも私はまだいいかな、まだ転校してきてあまり経っていないしもっと皆の事知りた  
いから」  
「うーんっ！ 実川さんクールなのがいい人すぎて私が好きになっちゃいそうだよおー」

この天然女子さんチョロすぎだろ……実川さんにくっついてデレデレしてる。  
でもなんか実川さんの方も嬉しそうなんだよなー。  
いい友達になれそうな気がする。

「じゃあ恋人作るぞ大作戦は綾瀬くんが引き継ぐことになりますっ！」  
「いや引き継がないし、なにその作戦!？」



「はあー疲れたあー」  
「そーだねー。いつも一緒に帰ってもらってごめん」  
「いいよいいよ。疲れたのは木村さんの絡みが多かったせいだから」

学校からの帰り道。もうアパートのすぐ前の道まで帰ってきた所で実川さんが俺の方を振り返って言った。

「そっかー。私は木村さんみたいな人好きだなあー。友達になりたいなって思った」  
「うん。きつとなれるよ、実川さんなら」  
「ありがとう、綾瀬くんってほんと優しいよね。綾瀬くんとももっと仲良くなりたいなっ！」

実川さんはニタッと笑いまた前を向いて歩きだした。  
学校では口数も少ないクール美少女だけど二人の時はよく喋るし笑顔が可愛い美少女。  
俺はそんな実川さんのことをもっと沢山知りたいと思った。

## 令嬢の実家でパーティー

「綾瀬くん。この間言った私の家のパーティー今日なんだけど準備できてる？」  
「あっ、ごめん忘れてた！ 何時頃出るの?!」  
「えっとお.....確か真弥《まや》には5時に下の公園に待ち合わせって言ったから、あと20分くらい」

真弥というのは天然ちょいおバカ美少女のクラスメイト木村真弥《きむらまや》のこと。

実川さんも木村さんとすっかり仲良くなってこの間は二人でディズニーにも行ったらしい。俺は誘われなかったんだけど.....

写真は沢山見せてくれたけど、俺行ってないから羨ましすぎて泣いたわっ！。

「実川《みかわ》さん.....俺って服、何着ていったらいいの？ タキシードとか？」  
「そんなに畏《かしこ》まらなくてもいいよ。普段の服でいいと思う」

お金持ちの家のパーティーだからちゃんとしなないといけないと思ったんだけどいいの？ ていうか、そもそもタキシードなんか持ってないけど.....

仕方なく俺は持っている服の中でも一番まともだと思う服を着て行くことにした。  
まあ店に行った時にマネキンがきてた服だけ。



アパートを出てすぐにある公園に着くとそこには木村さんがベンチに座って居眠りをしながら待っていた。

「真弥っ！ 起きて」  
「ふへっ! ?、なに! ? なにごと?」

「もうタクシー来るから行かないと」

「そうだねっ……あれ？　なんで綾瀬くんがここにいるの？」

焦った俺は実川さんの顔を見て合図を送るけど無表情でこっちを見ているだけ。  
間を空けると余計に怪しまれそうだから慌てて俺は答えを返す。

「と、友達だから！　この間話したとき俺も誘われて……」

流石にこんな理由じゃ信じてもらえないよな……

「そーなんだあー。仲良かったなら教えてよお、紗希」

「あ、うん。ごめん」

実川さんは多分何も思いつかなくて俺に丸投げしたんだろう。  
木村さんが天然おバカで助かった。

タクシーに乗って数分ほど走り、高級住宅街に入っていく。  
その中でも一際目立つ大きくて立派な家の前で車は止まり外に出た。

「……これってモダンなお城じゃなくて家だよな、ここが実川さんの家？」

「うん。一応ね」

確かに表札には『実川』と書いてあるけどまさかここまでお金持ちだとは思わなかった。  
何もかもが俺の実家の三倍くらいの大きさ。

実川さんに付いて行き、中へ入るとまずはミニ日本庭園みたいな庭があってその先に  
大きな建物が建っている。

玄関から中に入ると目の前には全身真っ黒な正装をしたおじさんが立っていた。

「只今《ただいま》、お父さん」

「おかえり、紗希。この方々は？」

「二人共私の友達」

「そうか、もう友達ができたんだな。それは良かった。今日は沢山楽しんでってください」

そう言って実川さんのお父さんは長い廊下の奥へと歩いて行った。

俺たちも実川さんのあとに付いていき奥へと進んで行く。

少しずつ物音や人の声が大きくなっていき実川さんが足を止めた先を見ると。

そこには大きなロビーがあって沢山の大人が料理を食べたり会話をしたりお酒を飲んで

だりという光景が広がっていた。

「すごっ……結婚式みたい」

「年に一度沢山の知り合いをお父さんが集めてパーティーをするんだけど。私はほとんど知らない人ばかりなんだ」

それから俺は高級バイキングでお腹いっぱい好きなものを食べ幸せの絶頂に達し、実川さんたちはというと俺をおいて何処かに行ってしまった。

どうしたらいいかもわからないので俺はその辺をてきとうに歩いて周ることにし次いでにトイレを探す。

トイレから出てロビーに戻っていると実川さんたちを見つけ、俺に気づいたみたいでこっちに近づいてきた。

「もう9時前だしそろそろ帰らない？ 明日早いんだし」

「そうだね。じゃあ帰ろっか」

「あれ？ なんか酒臭くない？」

「真弥がぶどうジュースと間違えてワイン飲んじゃったんだ」

木村さんは実川さんの肩でぐったりして眠っているよう。

こうして実川さんの実家でのパーティーは終わり眠った木村さんを送ってからアパートに帰った。

「あぁー疲れたぁ。やっぱし自分の家が一番だねっ！」

「いや、ここ俺の部屋なんだけどね」

実川さんはベットに飛び込んで横になりゴロゴロ転がっている。

俺はパーティーでもらったお土産をしまつてテレビを付けカーペットの上に座った。

この部屋の主《あるじ》が自分のベットを取られ地べたに座っているだと……

そういえば最近ストーカーの話も聞かないしそろそろ自分の部屋に戻ってもいいのでは。

「綾瀬くん。いつもソファで寝てもらうのも悪いし今日から一緒にベットで寝よっか」

「へっ……？」

なんか突然、童貞を殺すイベントが始まったんだがあ！！???

## 居候クール女子は悪役令嬢だったのか？

『綾瀬《あやせ》くん。いつもソファで寝てもらうのも悪いし今日から一緒にベッドで寝よっか』

この実川《みかわ》さんのこの一言で俺の脳内は大パニックになりほとんど機能しなくなっていた。実川さんは上目遣いでベッドの上をポンポンと叩いて俺を誘惑する。

「実川さんっ！？　ダメだよ、俺たち付き合ってもないのにそんな事したら」

「え？　なんで……そんな事って。ただ一緒に寝るだけだよね」

「寝るだけって、ん？……」

「もしかして実川くん。今やらしいこと考えてたでしょ」

実川さんの顔が無表情になり怖い。あれ、俺を誘ってたんじゃないの？……

今考えてみれば、実川さんみたいなS級美少女が俺みたいな陰キャ男子をわけ無くそういう行為に誘うわけがないっ！。

「綾瀬くん。今日はアパートの外で野宿でもする？」

「とんだ勘違いをしていました……野宿だけは勘弁してください」

俺は、最大級の謝罪ポーズ DOGEZA をしてカーペットに頭をこすり付けた。

少し間が空いてから頭に何かが乗る感触を感じる。

これは、実川さんが俺の頭に足を乗せてグリグリしてしてる。多分。

まさか実川さん、本当は悪役令嬢だったのか！

「綾瀬くん、頭上げてみて」

「えっ……いいの？」

「うん」

頭をあげて実川さんの方を見るとマジックハンドで丸めたタオルを挟み俺の頭に押し付けていた。それになんかニヤニヤしてるし。

「ごめん、ちょっとからかいたくなって。別に全然怒ってないから」  
「まじかぁ.....俺、実川さんがドSなのかと思ったよ」  
「思った？ ドSなのかもよ？ 冗談冗談」

まんまと俺は彼女に遊ばれてしまった。  
そういえば家《うち》にマジックハンドなんかあったっけ.....



次の日の朝。  
起きるとキッチンには実川さんが立って料理を作っていた。

「綾瀬くんおはよう。オニオンスープ作ったから食べてみて」  
「あ、うん」

俺は実川さんが作ってくれた野菜たっぷりオニオンスープをレンゲですくい口に入れる。

「美味しい！ 朝から身体が温まっていいね」  
「うん。オニオンスープは疲労回復にもいいし美味しいから一石二鳥なんだー」

朝起きたら自分の家で美少女がオニオンスープを作ってくれるなんて夢見たい.....  
もしかして俺一生分の運使い果たしたんじゃないよな。

「綾瀬くん.....その、私と一緒にいて楽しい？ 迷惑掛けてないかな」  
「ぶっ！？ 突然どうしたの？」  
「だって私が無理言ってここに住まわせてもらってるし。綾瀬くんは私にして欲しいこととかないの？」  
「洗濯とか？」  
「そんなじゃなくて.....少しえっちなことでもいんだよ？」

ちょっと実川さんなに言ってんだ?! 最近俺に対して色々と緩すぎないか?  
でもこれはチャンスなのでは、尝试してみる価値はある。

「.....じゃあコスプレとかどう？」

「なんのコスプレ？」

「いや、別に決まったものはないけど」

「じゃあ、ちょっと待ってて！」

そう言うと実川さんは俺の部屋をそそくさと出て行ってしまった。

ていうかもうすぐ学校に行かなくちゃいけないのにどうしちゃったんだろ。

最近学校での実川さんと家での実川さんが違いすぎてたまに混乱する。

数分ほど経ち玄関のドアが開いて実川さんが戻ってきたんだけど……

「ちょっ！？ なにその露出多めのセーターっ！」

「綾瀬くん、どう？ これで満足？」

実川さんは背中がぱっくりと開きたいわゆる『童貞を殺すセーター』を着ていた。

ノースリーブで袖がないので白くて細い腕がスラリと見え、下半身には魅惑の絶対領域が……。なんか俺が悪いことしてるみたいじゃないか！？

「あ、うん。可愛んだけど……露出多すぎるよね」

「そうかな……これくらいならいつでも着るけど」

「いや、体張りすぎは良くないし。それに俺、手錠付けられるのも嫌だから大丈夫」

本心では少し惜しい気持ちが少なからずあるけどこれ以上やると法的にヤバそうなので諦めることにした。

## 雨降る放課後

ザーザー

帰りのホームルームをしていると外は明るいままなのに強い雨が降り始めた。  
朝見た天気予報じゃあ確か晴れだったはずなんだけど。

「最近天気が変わりやすくて危険だから今日はまっすぐ家に帰るように」

担任の小野先生の話が終わって帰る準備をしていると俺の横の席に座っているクール美少女、実川紗希《みかわさき》がこっちを無表情で見ている。

「ねえ綾瀬《あやせ》くん。私今日傘持ってない……」  
「なら、俺のを使えばいいよ。濡れて帰って風邪でもひいたら良くないし」  
「それは悪いからいい」

そう言うと実川さんは俺の耳元に顔を近づけ小さな声で『一緒に入ればいいんじゃない？』と顔を赤らめて囁いた。

そう彼女はいわゆる『クーデレ』なのである。



「実川さん……これ凄い恥ずかしんだけど」  
「もうちょっとだから我慢してっ！」

実川さんと一緒に歩いていると男子からの目がすごい気になる。

「ていうか、実川さんくっつき過ぎ！」  
「いいのぉー」

実川さんの胸が俺の腕にあたって少し悪い気持ちになる。

ていうか俺みたいな陰キャ男子とこんなにくっついて歩いててもいいのかな。

「ねえ、綾瀬くん。私たち傍《はた》からみれば恋人に見えたりするのかな.....」

「し、しないでしょ。.....多分」

「そういえばさっきから綾瀬くんの肩濡れてるけど、もっとくっつきなよお」

「いや、いいからっ.....大丈夫」

これ以上くっついたらもう抱き合ってるのと同じだって。

もしこんな所を学校の人に見られたりしたらどんな噂が立つかわからない。

実川さんは危機感がなさ過ぎるんだ。

アパートに着き俺はまず、濡れた身体を温めたかったので風呂に入った。

スッキリした俺は服を着て冷蔵庫の牛乳を一気飲みする。

牛乳を飲み干したところでベットに座っている実川さんがこっちを見て言った。

「綾瀬くんって.....牛乳派なの？」

「うん。そうだけど」

なにその得体ののしれない生き物を見るような目はっ！

「絶対コーヒー牛乳でしょ」

「えっ.....なんで？」

「ミルクのコクがあって程よい甘さと少し苦いところが美味しいからっ！」

「いやいや。牛乳の方が美味しいでしょっ！ 大人も子供も飲めて牛乳本来の味が楽しめるんだから」

まさか実川さんがコーヒー牛乳派だったとは.....だから家《うち》の冷蔵庫に見覚えのないコーヒー牛乳が沢山入っていたのか。

「別に飲みたいなら冷蔵庫から取って飲んでもいいけどー」

「いや、俺は牛乳で十分だから」



翌日俺はいつものように風呂上がり冷蔵庫を開けた。

ホルダーにはコーヒー牛乳がぎっしりと置かれていてまるで家《うち》の冷蔵庫じゃないみたいだった。

コーヒー牛乳かぁ.....もう何年も飲んでないなー。一本ぐらい飲んでもバレないよな。

俺は恐る恐る瓶の蓋を開け口をつける。

「うまっ!？」

まさかここまでコーヒー牛乳が美味かったとは.....

夜、俺は風呂に入った後コーヒー牛乳を持ってベッドの上に腰掛けた。

隣には実川さんが座っていて右手には牛乳を持っている。

「実川さん.....しょうもないことで意地張ってごめん。コーヒー牛乳も美味しいね」

「私の方もごめん。牛乳がこんなに美味しいとは思わなかった」

ほんとに凄くしょうもないけどこの一瞬も何気ない幸せな日常だと実感した。

## 風邪をひいた俺を看病してくれる美少女

風呂から上がって髪を乾かしいつものスウェットに着替えた俺はリビングのベットに腰をかけテレビを付けた。隣にはもうすでに風呂に入ってパジャマを着ている実川さんがいる。僕らは冷蔵庫で冷えたコーヒー牛乳を持ってテレビ画面を眺める。

「はくしょんっ」

「綾瀬くん、今のはくしゃみ？」

くしゃみに聞こえなかったのだろうか、確認してくる実川さん。

「うん、くしゃみ。多分湯冷めしてるんだと思う」

「大丈夫？」

「うん多分……ゲホっ、ゴホ」

あ、咳だ。湯冷めじゃ誤魔化せないかも。

「綾瀬くん。風邪ひいてるよね」

「……うん。実は今日の朝から」

「この前ちゃんと傘に入ってなかったからでしょお」

「すみません……」

俺は返す言葉もなく頭を下げるばかり。

すると実川さんはベットから立って脱衣所の方へ向かった。

帰って来ると右手にデジタルの体温計と総合感冒薬を持っている。

「今日は薬を飲んで早めに寝ること。はい、体温測って」

「うん……ほんとにごめん」

体温計を脇の下に挟み音がなったら外して温度を確認した。

「37.3℃もあるじゃんか。明日は学校休まなきゃいけないかも」

「そうだよね……」

「じゃあ今日はもう寝るよっ！」

歯磨きをした後、今日は俺がベットで寝て実川さんがカーペットの上で寝ることになった。社長令嬢を床で寝させることに申し訳ない気持ちになった。



翌日。

いつもなら俺が実川さんを起こす役なのに今日に限っては実川さんが俺を起こす。

「綾瀬くん朝だよ。起きて」

「うー」

変なうめき声を発する俺。

すると俺のおでこに実川さんが手を当ててくる。

「昨日より熱があがってるなあー。今日は休まないとダメだね」

「.....」

「私は学校に行くけど耐えられなくてえらい時は連絡して。帰ってくるから。それとお粥《かゆ》作っておいたから食べられる時に食べてね」

「ごめん.....ありがとう」

そしたら実川さんは制服に着替えた後アパートを出て行った。

少ししてお腹が空いてきたので実川さんが作ってくれたお粥を食べる。

「美味しい.....」

おもわず口に出して感想を言ってしまうほど美味しかった。



時刻は午後5時過ぎ。

玄関のドアが開いて実川さんが帰ってきたのが分かった。

起き上がって確認すると実川さんは両手にポリ袋を持っていた。

「ただいま。綾瀬くん。帰りにスーパーに寄ってポカリとか熱さまとか色々買ってきた」

「痛み入ります.....ほんとに助かる」

「で、少しは良くなった？」

「うん。お陰様で咳も止まったしだいぶ良くなったよ。ありがとう」

「.....うん」

なんだろう。ただお礼を言っただけなのに実川さんが赤面している。

俺、なんか変なことでも言ったのかな。

「私、ほんとに心配したんだからねっ！」

「次からはきおつけます.....」

彼女はため息をつき俺の顔をみてクスッと笑って見せた。

俺は一瞬ドキッとし、恥ずかしくなって実川さんから目を離した。

## 居候美少女がお隣にお引越し？！

「綾瀬くん。RINE やってる？」

「あ、うん。一応してる」

RINE とはどの世代の人もみんな使っているコミュニケーションアプリ。

国内では 8600 万人以上の人が使っているらしい。

「私、ストーカーにも付きまとわれなくなったしそろそろ自分の家に戻ろうと思うんだ」

「そ、そーなんだ。なんか突然だね」

「うん。だから綾瀬くんと RINE 交換しときたいなって」

「え、なんで？」

「だからあー、今まで色々お世話になったし……これからもっと話したいし……」

実川さんは上目遣いで俺をみて身体をクネクネと動かす。

学校の時の実川さんとは行動や表情が違いすぎてエロいギャップを感じる。

「うん。俺の方こそ風邪の時とか色々助かったしこれからも沢山話したい」

「じゃあ……結婚する？」

「ブハッ！？ ゴホゴホ」

思いもよらない美少女からの突然の告白に飲んでいたコーヒーが気管に入り噎せた俺。

慌てて実川さんが側にきて俺の背中をポンポンと軽く叩く。

「ごめんごめん。ちょっとからかいたくなって」

「実川さんそれは良くないよ！？」

でも本心。S級美少女に告られて気分のいい俺。

「じゃあ RINE 交換しよっ！」

「えっと……QRコードで読み取るんだよね？」

「うんっ！ 私がコードですから綾瀬くんは読み取って」

なんか凄く楽しそうな実川さん。  
俺的にはこの生活も幕を閉じてしまうから少し寂しんだけどなー。

「おおー、綾瀬くんの RINE 入った！ 私男の子のラインお父さん以外いないから綾瀬くんが初めてなんだよねー」

「そうなんだ。実川さんならもっといてもおかしくないのに」

「男の子から交換しようって言われるけど誰かも分からないし必要ないから断るんだよ」

「まあ、実川さんモテるからね」

するとまた実川さんが上目遣いをして顔を近づけてきた。

「綾瀬くんが私の最初の人なんだからねっ……」

「勘違いする言い方しないで！？ 連絡先でしょ？」

「綾瀬くんはいつもいい反応してくれるなー」

その夜実川さんは自分の部屋に戻って行った。実川さんが居ない俺の部屋は殺風景になり冷蔵庫のコーヒー牛乳もすっかり空っぽだった。

こうしてみれば実川さんとの思い出、沢山あったなあ。

実川さんの家のパーティーに行ったり二人でスーパーに買い出しに行ったり……

全部楽しい思い出だった。

ピロン ピロン

スマホの着信音がなり画面を明るくすると実川さんからの通知だった。

紗希『綾瀬くん。私が居なくなって寂しくなってない？』

春『なってないって……』

紗希『本当かなー。私は結構、寂しいんだけどなー』

春『僕も寂しくなってきたかも……』

俺だけの生活が再スタートして3日後の朝。

あれから実川さんとは毎日 RINE で話している。

ベットに転んでソシャゲをしていると玄関の方から物音がして少ししてからドアを  
ノック

する音が聞こえる。

そういえば今日はネット通販で冷凍唐揚げ買ったんだっけ……

俺はソシャゲのタグを切って玄関へと急いだ。

ガチャっ……

財布を持ってドアを開けた先には大荷物を持った実川さんが立っていた。

「え？ なんで実川さんが……」

「寂しすぎて戻って来ちゃった。またよろしくお願いしますっ！」

クールな彼女は笑顔でまた僕の家に戻ってきた。

---

最近引っ越してきたお隣さんは、転校生のクーデレ令嬢だった。

---

著 星海ほたる

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---